

## 解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい

問題文は、一、二の二題からなっています。  
配点は、それぞれ満点の二分の一です。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

夜中に納豆を喰う。寝酒の肴である。酒は日本酒の昔ながらのヒヤ、常温である。納豆は今風の小さなパック、あれひとつで、まあ、足りる。葱を刻んだり、玉子の黄身を落したり、その程度の手間も、もう睡くて、面倒臭い。醤油と辛子だけだ。その醤油も使い方が年々、つましくなっていく。納豆はもともと好物なのだが、これを食べていると、なにやら、神経が息まる。

さて夜中に一人で納豆を喰いながら、遠い旅へ出ることを思う、とても言うのか。そういうことも、ないではない。しかし近頃ではそれよりもしばしば、一人のドイツ人の男性の姿を思い出す。もう老齢に近い。今から三十年昔のことだ。東京は武蔵野の、当時は郊外よりもさらに外と感じられていた土地にある大学に、私は週に一度朝早くから通っていた。稼ぎのためである。その午前中の十五分ばかりの休みの間に、大学の構内のはずれのグラウンドを歩いてみると、冬場にかかる頃から、かならずその男性と、かならずほとん

ど同じ所で出会うようになった。同じ散歩でも、私のなどはせかせかしたものだだったが、その男性はいかにも逍遥<sup>a</sup>というような、悠<sup>b</sup>ヨウ<sup>c</sup>ウ<sup>d</sup>追<sup>e</sup>らぬ、しかも何かに常に耐えるような足取りで近づいて来る。

グラウンドの中央あたりで私たちは立ち停まり、私は下手なドイツ語で、彼は長年日本で学生に教えている外国人に特有の、妙に聞き取りやすいドイツ語で、しばらく立ち話を交わす。たいていは、今日は一段と寒いとか、奥多摩の山々が近く見えるとか、その程度のことだったが、ある日のこと、自分は日本に来てもう数十年になり、日本の食べ物にもすっかり馴れたが、あの納豆というものだけは、粘りはともかく、臭いがどうも、と穏やかに笑いながら眉をかすかにひそめた。その顔が、三十年経った今になり、夜中に納豆を喰う私の目に浮かぶようになった。

長年そこで暮らしても、どうにも馴れぬ味や臭いはあるものだ、といまさら感心するのも、まことに月並みなことだ。しかしあのドイツ人の男性は当時、今から思えば、現在の私と同じぐらいの年齢、いや、もうすこし年下だったかもしれない、と数えれば、同じ月並みでも、感慨はもうひとつまさる。たしか、日本二骨ヲ埋メルツモリデイマス、とそんな日本語を口にしていたはずだ。それにひきかえ生涯故国に留まって、老境に近づいて夜中に納豆を喰いながら、

そのうちに自分にとって、ひよっとしたら、この喰い物しか口に合  
わなくなるのではないか、と妙なことを心配しては呆れている私  
は、どういう「運命」にあるのだろう。

時から逃れんものと世界中を駆け回る者もいれば、揺り籠<sup>②</sup>

(故<sup>I</sup>国)に留まりながら時を殺す者もいる、とうたった詩人  
もいる。

しかし、どんなものか。老境に深く入るまでこのまま故国に留  
まって夜中に一人で納豆を喰っている、というふうには、かならず  
しも、行かないのではないか。不帰の旅へ早目に立つということは  
別にしても。十年か後にはあるいはどこか遠い異国の町に住みつ  
いていて、何を肴<sup>d</sup>にしているか知らないが寝酒を嘗<sup>d</sup>めながら、あの  
納豆というものは、味を忘れたわけではないが、日本人の多い街ま  
で行けば手に入らぬでもないが、しかしあれを昔、どんな気持で、  
夜中に一人で喰っていたのだろう、とふっと首をかしげるというこ  
とも、あるかもしれない。

高校の同窓生に一人、停年の直前に東京の家をすっかり畳んで、  
家族ともどもアメリカの東海岸の街へ引き移ったのがある。やむを  
得ぬ事情のあったことで、唯一残された道としてそれを選ぶまで  
にはさまざま心も乱れたことだろうが、最後の同窓会に現われた時

には、「会の通知は送ってください」と、さっぱりとした顔で言っ  
ていた。かと思えばもう一人の同窓生は今からもう四十年ほど昔  
に、おそらく遊学のもりで渡ったのだろうが、北ドイツの街で邦  
人たちに日本からの日用品を届けるというアルバイトをするうち  
に、輸出入を扱う商会の主人となり、今日に至っている。同窓会に、  
人は来られなかったが、ワインが一ダース届いたこともある。この  
二人の同窓生の移住には四十年ほどの時差があるわけだが、あるい  
はそれぞれに、いよいよ旅に立ったのがつい昨日のことだったよう  
に思われる夜があるのではないか。

旅と言えば、われわれ日本人の頭からは、とかく移住ということ  
が抜け落ちるが、古今東西、人の旅の半数を占めるのは、移住では  
なかったか。たしかに、諸外国に比べれば、流出入のすくないほう  
の国ではあっただろう。ここ半世紀あまり観念の「国際化」は進ん  
だが、気質のほうはさらに内弁慶になった気味もある。海外での生  
活を幾度も重ねた末に、日本ではあまり良い老後も見えないけれ  
ど、やっぱり外国では、心はともあれ胃袋が、暮らせない、と思  
切る高年者も多いのだろう。外国に来てまず日本食を求める若い者  
たちもすくなくないとか聞く。

しかしまたその一方ではわれわれにとって、生活の伝統習慣の重

しが、だいぶ、利かなくなっている。根無しとまでは言わず、根が浅くなっている。ということは、これを水草に喩えれば、浮き草と成って流れ出す、その兆候かもしれない。国際化を叫ぶ人は多いが、流出の時代を思う人はすくない。悪い事情が加われば、流亡にもなる。身は習わしものと言われるが、生活習慣というものは堅固なようで、あんがい、はかないものだという意味にもなる。通りすがりの異国の町にあつて、自分はここでも暮らせるとふいに感じてハッとすることはありはしないか。<sup>④</sup>いきなり蒸発しかかるような、恐怖の混じることもある。

納豆に戻れば、私と同じ年配で、西のほうから東京に出て来て住みつくことになった知人の多くは、郷里では、あんなもの、喰ったことがなかった、と言う。初めは気味が悪くて手が出なかったが、それが三年もして、東京の生活に揉まれるようになり、食事もとかく半端になりがちの頃、ある夜、ドンブリ飯に納豆をぶちこんでがつと掻きこんでいる自分に気がついて驚いたという。あれは大都市の生活に、関東の荒い空気に、ささくれ立ちがちな神経を宥めるのに、良い喰い物のようだ。

<sup>⑤</sup>\* 大坂の人にすれたる冬の月 利合

<sup>⑥</sup> 芭蕉七部集の「炭俵」に見える句であるが、関西で暮らしたこと

のない私にも、どこぞから浪速に出て来て何年か暮らした人の心境キョウが、冬の月の情景とともに見えるような気がする。しかし「大坂」を「大Ⅱ阪」にしたなら、どうだろう。「すれたる」に、

どうも色気のようなものが伴わないのではないか。まして「東京」にしたなら。東京の人には、すれるもすれぬもない、馴れるも馴れぬもない。気がついたら、自身が東京の人になっていた、しかも東京の人となった自身にはいつまでもすつかりとは馴れない、というものらしい。西のほうで育つて東京で暮らす知人に、では、納豆にも馴れたかい、とたずねると、好きにはなつた、と答えながら、もうひとつ煮え切らない。好きにはなつたが、馴れたとは言えない様子である。<sup>⑦</sup>

両親が岐阜の出身なので、私自身も東京の生まれ育ちながら納豆というものに馴染んだのは遅い。敗戦から三、四年した夏、六三制の義務教育が導入されて間もない、私も来年か再来年に、まだ校舎もろくに建っていない新制中学へ進むことになっていた頃のことだ。なぜ、納豆が夏でなくてはならないのか。六三制と何の関係がある。じつは中学までの義務教育があちこちで、これを「享受」する側に、子供とその親に、困惑をもたらしたことは、今では忘れられている。年が満で十二、三にもなれば働きに出るのを当然とした、

またその予定だった家がすくなくはなかったのだ。

あれほどの夏であったか、昭和の二十三年か四年か、夏の朝の表通りに物売りの声が急に繁くなったのだ。アサリ、ハマグリ、シジミイ、と叫ぶのは、大人の声だった。それにひきかえ、ナットウ、ナットウ、ナットウ、ナットウ、と呼ぶのは、まだ声変わりしていない、あるいは発声のすこし苦しくなりかけた、少年たちの声だった。十分ほどの間でつきつきに通る。そのたびに、母親が私の眼をじろりと睨む、ように私には感じられた。

母親が健気な少年たちに感心して、毎朝のように呼び止める。それが我家の納豆に馴染んだ始まりだった。声が表を通り過ぎてしまつてから、私が尻を叩かれ、後を追つて走つたこともしばしばある。私と同年ぐらいの子が、納豆のツトをひらいて、瓶から練り辛子をたつぷり塗ってくれた。今のよりはだいぶ量が多いが、一包だけで、それに醤油をどほどほどかけて、一家六人の朝食のオサイがまかなえたものだ。

あの頃を思えば、夜中に納豆を喰いながら、はるばると来つるものかな、という気がする。歲月や時代のことばかりでない。とにかく長い道を歩いて来て、いまここに今夜のところまた逗留とどましている心である。そして旅の終りに近づいて、また同じものを、**醤油のか**

**け方**こそすくなくなったが、つくづくと喰つて、息をついているかと言えば、それは、安堵感はある。ありがたいとも思っている。しかしそればかりでない。私の身体はつぶやく。こういうものしか喰えない、と言っているのではないよ、と。たいていのものにはいずれ馴れて、これだけあれば間に合うとまで思うように、長年、できているということだよ、と。

旅のことなので、先はまだ知れないわけだ。

(古井由吉「夜中の納豆」)

(注) \*大坂：江戸時代には「大坂」と表記され、明治四年(一八七二)以降、今日と同じく「大阪」と表記されるようになった。

\*利合：堤久兵衛。芭蕉の弟子の一人で、芭蕉庵の近隣に住したと伝えられる。

問一 傍線部 a・c・g の意味として最も適当なものを、次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

a 逍遙

イ ゆつたりとした気持ちで歩くこと

ロ ゆつくりと目的地へと接近すること

ハ 気ままにあてもなく歩くこと

ニ わくわくした気持ちで目的地へと急ぐこと

ホ 憂鬱な気持ちで長い距離を歩くこと

c 不帰の旅

イ あまりに遠い旅路であるので戻るに戻れないこと

ロ あまりに危険な場所のため命の保証がない旅行

ハ 自分の人生を賭けて、外国に移住する覚悟の旅

ニ 母国が滅亡し、異国ですごすための亡命の旅

ホ 人生の長い旅路を歩んで、ついに亡くなること

g 逗留

イ しばらく同じ処にとどまること

ロ しばらく同じ考えで逡巡すること

ハ 立ち止まって深い溜息をつくこと

ニ 落ち着いたほっとした気持ちになること

ホ 過去の回想にしばし耽ること

問二 傍線部 b・f の語の片仮名の部分を漢字で書いたとき、同一の漢字を使うものを、次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

b 悠ヨウ

イ 抑ヨウをつけて話す

ロ 凡ヨウな作品

ハ 旧友を抱ヨウする

ニ 捕らぬ狸の皮算ヨウ

ホ 前途ヨウ々

f 心キョウ

イ 遊キョウに耽る

ロ キョウ順の意を表わす

ハ 情キョウの把握に努める

ニ 土地のキョウ界を定める

ホ 名簿をキョウ覧にふす

問三 傍線部 d・e の漢字の読みとして正しいものを、次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークしなさい。

d 嘗めながら

イ あたためながら

ロ ながめながら

ハ なめながら

ニ ほめながら

ホ みつめながら

e 宥める

- |   |       |
|---|-------|
| イ | たかめる  |
| ロ | なくさめる |
| ハ | なだめる  |
| ニ | やすめる  |
| ホ | ゆるめる  |

問四

傍線部①「何かに常に耐えるような足取りで近づいて来る」と、筆者はドイツ人の同僚についての印象を語っている。なぜそのような雰囲気はこの同僚は醸していたと考えられるか、その理由として最も適当な解釈を、次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 冬の武蔵野の冷え込みが厳しく、しかも高年齢となりつつあって、寒空を散歩することがつらかったから
- ロ 日本に心では馴染んだが、いつまでもその食事は馴れず、もう長く日本に暮らせないと感じていたから
- ハ 今の筆者と同じくらいの年齢であったと思われるから
- ニ 生まれた国を遠く離れて、異国の地で生き抜く覚悟を心に秘めていたから
- ホ 東京の荒っぽい空気のなかで、日常の忙しさに揉まれて、その心がささくれ立っていたから

問五

傍線部②「揺り籠」は、空欄Ⅰに入る言葉を喩えている表現である。この空欄Ⅰに入る語句として最も適当なものを、問題文にある漢字二字で記しなさい。

問六

傍線部③「ここ半世紀あまり観念の「国際化」は進んだが、気質のほうはさらに内弁慶になった気味もある」について、筆者の見解と一致するものとして最も適当なものを、次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 日本人も海外で活躍するようになったが、外国に移住する決断がつくのはようやく年齢を重ねてからである。
- ロ 外国に移住した結果、その土地の食生活に馴染んで、故国に暮し続ける日本人にも強く勧めるようになった。
- ハ 日本では、人間の流入が少ないので、外国への旅と言っても、ほとんど移住ということが思い浮かばない。
- ニ 外国旅行をしても、海外生活を繰り返しても、馴れ親しんだ食習慣などの日本の伝統習慣に固執してしまう。
- ホ 日本人の国際化が進んでも、その反面である、固有の伝統習慣の喪失や人間の流出を心配する人がすくない。

問七 傍線部④「いきなり蒸発しかかるような、恐怖の混じることもある」について、それは筆者のどのような気持ちを表わしているか、最も適当なものを、次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 日本人にとって伝統や習慣の重みが失われてゆき、根無し草のようになってしまうことを不安に思う気持ち
- ロ 国際化を叫ぶ人は多いが、その結果、日本人が海外へと流出してしまうことに無頓着なことを憂える気持ち
- ハ この半世紀、観念の国際化は進んだが、これと比べると、気質の国際化が進まないことを不安に思う気持ち
- ニ 外国では、食習慣に順応して暮らすことができず、日本食を口に入れることができない境遇を憂える気持ち
- ホ 異国の生活習慣に順応しきって、故国やその伝統・習慣さえも忘れてしまいそうな自分を不安に思う気持ち

問八 傍線部⑤「大坂の人にすれたる冬の月」について、次のイ〜ホからこの句と季節が同じでないものを選び、その符号をマークしなさい。

- イ いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡 子規
- ロ 流れ行く大根の葉の早さかな 高浜 虚子
- ハ 学問のさびしさに堪え炭をつく 山口 誓子
- ニ 勇氣こそ地の塩なれや梅真白 中村草田男
- ホ 鮫鱧の骨まで凍ててぶちきらる 加藤 楸邨

問九 傍線部⑥「芭蕉七部集」の芭蕉とは松尾芭蕉である。次のイ〜へから芭蕉の作品を一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 『閑吟集』
- ロ 『菟玖波集』
- ハ 『梁塵秘抄』
- ニ 『笈の小文』
- ホ 『去来抄』
- へ 『誹風柳多留』

問十 空欄Ⅱに入る最も適当な語句を、次のイ〜へから一つ選び、その符号をマークしなさい。

- イ 大江戸
- ロ 大阪
- ハ 奥多摩
- ニ 故国
- ホ 異国
- へ 外国

問十一 傍線部⑦「好きにはなつた、と答えながら、もうひとつ煮え切らない」について、この表現で筆者は、東京に暮らす人間のどのような気持ちを表わそうとしているか、三十五字以内で記しなさい（句読点も字数に含むものとする）。

問五

傍線部⑧「そのたびに、母親が私の眼をじろりと覗む、ように私には感じられた」について、筆者には、なぜそのような感じられたのか、その理由として最も適当なものを、次のイ〜ホから一つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 納豆売りが来ても、いつも「私」がもたもたするので、

しばしばあやうく納豆を買ひ損ねそうになったから

ロ 「私」が納豆が好物であったため、母親が好きでもない納豆を、わざわざ買ってもらっていたから

ハ 働きに出ることが当たり前の時代に、「私」が中学に進むことを決断したことに母親が反発していたから

ニ 健気に納豆売りとして働いている少年と比べて、何もしていない「私」に、後ろめたさを感じたから

ホ 納豆を買いに走ることが「私」の役目で、納豆を買いに行くように「私」に催促していると思われたから

問六

傍線部⑨「夜中に納豆を喰いながら、はるばると来つるものかな、という気がする」と筆者は、過去から現在への歩みを感慨をもって語っている。この過去と現在との隔たりは、「私」の納豆の喰い方の変化に象徴的にあらわれているが、その変化した点を問題文から六字で抜き出ささい（句読点も字数に含むものとする）。

問七

問題文の内容に合致していないものを、次のイ〜へから二つ選び、その符号をマークしなさい。

イ 納豆を喰うと、いつも、かつて同僚であったドイツ人との交流を思い、異国に暮らす彼が哀れになってくる。

ロ いまは故国で好物の納豆を喰っているが、異国にあれば納豆を喰っていた自分を不思議に思うかもしれない。

ハ 生活習慣や伝統は思いのほか脆いものであるが、国際化の時代に、そのような感傷などに浸ってられない。

ニ かつて納豆は必ずしも一般的でなく、とくに西から来た人間には東京に暮らして初めて出会った食品であった。

ホ 「私」が納豆によく馴染むようになったのは、物売りの少年の声が多くなった、ある夏のことであった。

へ 夜中に納豆を喰いながら、ふと自分の来し方行く末が想われて、その長い歩みをしみじみ振り返ってしまう。